朝日新聞（夕刊）
9　4版　2012年（平成24年）11月15日　木曜日

自宅でみとられたい

最期の選択 3

最期は自宅で迎えたい。在宅医療の場では生活を楽しみ、平穏な最期を迎えることが可能だ。家が病室、電話がナースコールになる。ただし信頼できる医師、看護師、家族の協力があってこそだ。

福岡県久留米市の末次博子さん(66)は4年前、腹膜にがんが見つかった。3種の抗がん剤を試したが効果はなかった。「もう治療はできません」。病院の医師から言われ、家に往診してくれる医師を探した。

2年前の秋から齋藤医院（久留米市）の齋藤如由院長に診てもらう。初日、齋藤さんは博子さんや同居する長男夫妻とメールのアドレスを交換。「良いことも悪いことも全て話します。どうするか決めていきましょう」と話した。

博子さんは、初孫のさっちゃんと遊んだり買い物に行ったり。誕生日には家族写真を撮った。

末次博子さん（中央）。自宅での療養生活を楽しんでいる＝福岡県久留米市

おなかの腫瘍は大きくなり、今年2月、腸が破裂する危険もあるといわれた。

博子さんは7月に遺言、10月に終末期の治療方針についての希望を書いた。「最期まで齋藤先生に診てほしい。救急車は呼ばないで。自宅でみとられたい」

痛みが出れば齋藤さんは薬や点滴でとってくれ、必要なら夜も来てくれる。「怖くありません」と博子さん。齋藤さんは「必ずしも書面を作らなくてもいい。覚悟ができれば不安が減り、今を生きることができます」と言う。

兵庫県西宮市の有岡陽子さん(62)は、12年前から認知症を患う母富子さん(97)と2人暮らし。母は入退院を繰り返してきたが3年前、長尾クリニック（同県尼崎市）の長尾和宏院長と出会い、在宅療養を始めた。

昨年末、かぜが悪化し母は、老衰に近い状態に。痰が絡む様子を見て看護師から「吸引しますか？　一度すれば1、2時間おきに必要で、この年齢だとダメージも大きい。家族が望むならします」と言われ、「自然に任せます」。腹をくくった。認知症になる前、母は「最期は自然に」と話していた。

だが、年明けには食事ができるほどに回復。今年6月には北海道旅行をした。

便秘薬も睡眠導入剤も使わず、母の生活は安定している。「任せて安心の先生や看護師さんに出会えたから心配はない。土壇場で慌てないよう、私が強くならないと」と話す。

2008年の厚生労働省の調査では、終末期に自宅で療養したいという人は約6割。一方、約7割はその実現は困難と考えていた。介護してくれる家族に負担がかかる、急変した時の対応が不安、などが理由だ。国は06年、24時間体制で往診する医師への診療報酬を手厚くする「在宅療養支援診療所」の制度を作ったが、支援の質は様々だ。

長尾さんは「相性の良い医師を探すことが大切。病気だけでなく、在宅でみとりまでする医師がもっと増えてほしい」と話す。

（辻外記子）